
クローバーに誓って

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバーに誓って

【Nコード】

N2117T

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

「私を殺して」…幼なじみの彼女との、忌まわしい約束…。

「四つ葉のクローバーは、嫌いだわ」

マリカはうつむいて、ぼそりと呟いた。頬には、また新たに痣が出来ている。わずかに腫れているのが痛々しい。

マリカは何も言わないけど、また、おばさんにやられたのかな。マリカのせいじゃないのに。……泣いても、いいのに。僕はわずかに顔をしかめた。

「四つ葉のクローバーは、嫌い」

もう一度、マリカは言った。

「集めても、幸せになんかなれないじゃない……。ちっとも！」

そう言いながら彼女は、足元に群生しているハート型の葉を踏みこむ。

「ねえ、イリヤは知ってる？ 四つ葉のクローバーが生まれるわけ……葉の軸が踏まれたりなんかして傷つくと、出来るんだって。踏まれて、ひどい目にあってるのにどうして……ひとを幸せにしてくれるのかしら」

マリカは屈んで、クローバーを一本摘んだ。さっき踏みにじったクローバーを。

一枚の葉しかなくなってしまったそれは、わずかに歪んだハートの形をしていた。

「私のハートも、きつとこんな形してる」

僕は、何も言えず、ただマリカをじっと見つめるばかりで。そんな僕を、彼女は笑った。

マリカは頬の痣に手をやり、言葉を紡ぐ。
その顔はもう、笑ってなんかいなかった。

「母さんは怖がってるのよ。私が吸血鬼じゃないかって。イリヤも知ってるでしょ？ 私たち『ダンピール』は死ぬと吸血鬼になるってこと。私、死ぬのは怖くない。だけど……吸血鬼になるのは嫌よ。それは、……とっても怖いの」

ダンピール……。それは吸血鬼と人間との間に産まれた子のことだ。

大抵は、産まれてすぐに死んでしまうが、ごくまれに僕やマリカのように生き延びる者がいる。

生き延びることができたダンピールは、ちゃんと成長するし、寿命だって人並みだ。人間と何ら変わりはない。

吸血鬼を殺せる能力を持っていることを除けば。そして……彼女の言うように、死ねば吸血鬼になり未来永劫さまようことを除けば！

「死にかけたことのあるダンピールは……もう吸血鬼なのかしら」
ばい、とクローバーを放り捨て、マリカは呟いた。ブルネットの長い髪が風にあおられて彼女の表情を隠してくれた。

マリカは小さい頃に猩紅熱にかかり、危うく死にかけたことがある。何とか助かったけれど、そのときからおばさんは、……つまりマリカの母親は彼女に対して冷たい態度をとるようになった。

一度、死の世界に行きかけたダンピール。もう吸血鬼になりかけているのかもしれない、と、畏怖と憎悪が見て取れる態度だということが、当時子供だった僕にもわかった。小さなマリカは、いつも泣いていた。

泣きながら、いつも四つ葉のクローバーを探していた。

四つ葉のクローバーの言い伝えを教えたのは、僕だ。同じダンピールであり、一つ年上の僕を、自分の兄のように慕ってくれるマリカを慰めるつもりだった。

「マリカ、四つ葉のクローバーにはね、ふしぎな力があるんだよ。元気で、幸せにくらせるし、愛情だって君のものになる。未来に希望だって持てる。見つけたら大事にとっておきなよ」

「きばう……あいじょう？　じゃあ、みつけたら……ママ、優しくなる？」

「うん、きつとね」

マリカはあのと、大きな目をきらきらさせていたっけ……。

「あのころはまだ、四つ葉のクローバーを信じていたわ……」

書き付けを読むように、平べったい口調だった。

その、数日後のことだ。

「イリヤ！」

呼び止められて、振り返る。

マリカが赤ん坊を抱いて立っていた。かなり危なっかしい抱き方だ。

「かわいいでしょう？ 私の甥っ子よ。外を見せてやろうと思って赤ん坊をあやしなから、ついでのように言葉を続ける。

「……姉さん、ねてるから。……おー、よしよし」

マリカは小さな声で歌を歌った。

澄みきった、優しい声。だが、その唇から紡ぎ出されるのは子守歌でなく、成熟した、切ない愛を歌った流行り歌だった。

「寝かしつけるには、ちょっと不似合いじゃないかい？」

「だって、子守歌なんて知らないもの。………よしよし、ねんね、ねんね……」

おー、よしよし、とあやしなから彼女は平べったい声で答える。

悪いことを言った。

マリカは母親に子守歌を歌ってもらった記憶も、抱きしめられた記憶も無いってことは、僕はよく知っていたはずなのに。

マリカはまだ歌っている。寝かしつけるには不似合いな子守歌を。きれいな声で。

赤ん坊は、寝入ったようだ。

マリカはぎこちなく危なっかしい手つきで、赤ん坊を抱きしめて
いる。

まるで、離すまいとするかのように。

「私、抱きしめられた記憶は無いわ。もしかしたらずっと小さな頃
には、抱きしめられたこと、あるかもしれないけど覚えていないわ。
……だから、抱きしめるの。抱きしめてあげるの」

そう言って、マリカは笑う。

(あれ……?)

僕はその笑い方に違和感を覚えた。無理やりに笑っているように
見えたからだ。

「そろそろ、甥っ子を返してこなきゃ。……ねえ、あのときのこと、
覚えてる？ 小さな頃にした約束」

僕は顔を強ばらせてゆっくりうなずいた。
忘れるはずもない。

子供の頃にした約束。できれば、その約束を果たすときが永遠に
来なければいいと切に願った、あのときのことを。

「あ！ みつけた。四つ葉のクローバー」
小さな手のひらには、小さな四つ葉のクローバーが一本。

「イリヤにあげる」

「いいのかい？　せつかくみつけたのに」

「私の分は、これからみつけるの。そのかわり……イリヤ、私のお願いひとつ聞いてくれる？」

満面の笑みで、マリカはクローバーを差し出した。僕はそれを受け取り、うなずいた。

「ひとつでも、ふたつでも、マリカのお願いなら。クローバーに誓って」

「じゃあ……」

マリカはポケットから一本の笛を取り出し、僕に渡した。

「これは……！」

その笛に見覚えがある、というよりも、僕たちダンピールにとっては必須品だ。

それは吸血鬼をこの世から消し去るときに使う笛なのだから。物心つけば必ず親から渡される物だ。

「私がホントに吸血鬼だったら……イリヤが殺してくれる？　この笛、あげるから。……ママから言われたの。これはダンピールの笛だから、おまえに持たせられないって。おまえは……吸血鬼かもしれないからって」

四つ葉のクローバーが、僕の手のなかでふるふると揺れた。

僕はしばらく考えた後、ゆっくりうなずいた。
家に帰って、わんわん泣いたのをよく覚えている。

「あのときの約束は、よく覚えてるよ。あのとき君からもらったクローバーも、笛も、ちゃんと持ってる」

「そう……」

もう、日が傾きかけて薄暗い。

「今から、私の家に来て欲しいの。……お願い」

マリカの声には、有無をいわさぬ雰囲気があった。

「ただいま」

マリカは、何でもないというようにドアを開け、部屋に入ってく。

ベッドに横たわる姉に声をかけ、そばの揺りかごに甥っ子を寝かせた。

「ただいま、姉さん。さ、ちびちゃん、おねんね、ねえ……」

マリカの姉は、両手を胸の上で組み合わせて、ねむっていた。

全身の血を吸い取られたかのように、蒼白い顔で。無論、息はもう無い。

無理に組み合わされた手首は、あらぬ方向に折れ曲がり、奇妙なことにクローバーで作ったブレスレットがかけられていた。

「マリカ……」

喉まで出掛かった言葉を、吐き気と共に抑え込む。

マリカ……。なぜ君は平気でいられるんだ。まさか君が。

……いや、違う。何かの間違いだ！ マリカ。君がこんなことするわけが……。

認めたくない思いが交錯するなか、マリカが口を開く。その声は、マリカのものであつて、マリカのもでなかった。

平べったく、抑揚の無い声。そして今まで感じたことのないほど、冷たいものが含まれた声だった。さっき甥っ子をあやしていたときとは、まるで別人だ。

「母さんはね……お風呂場にいるの」

夕闇が、マリカの髪を照らした。赤黒い夕日がブルネットの髪に混じる。

地獄の業火のように、忌まわしい色だった。

「ただいま、母さん」

マリカは蒼白い死体を抱きしめた。その強張った手首にはやはり、クローバーのブレスレットが巻かれていた。

「君が……やったのか」

マリカはうなずいた。その顔には微笑みが浮かんでいる。

「死体になってしまえば、叩かれることも無いわ。……母さん、甥っ子を抱きしめて、子守歌を歌ったの」

流行り歌でも口ずさむように、問わず語りに話し出す。

「つらくあたるのは、まだ我慢できたわ。だけど、私を叩く手で、他の子供を抱くことが許せなかった！ 母さんは子供が嫌いだってそう思いたかった！」

血を吐くような叫びだった。

「ずっと、家族がほしかった……。血を吸って殺したあと、母さんと一晩中ずっと一緒にいたの。今まで味わったことが無いくらい安らかな時間だった。……たのしかった」

夢みるように、彼女はつぶやく。

「この、クローバーのブレスレットは？」

「別に意味なんてないわ。しいて言うなら復讐……。かしら。クローバーの花言葉よ。なぜだか、そうしたかったの……。イリヤ」

マリカは、そつと僕の手に触れた。触れられたところが、わずかに痺れる。ダンピールのみがわかる、吸血鬼の証だ。

「約束よ。イリヤ。私を殺して！ ダンピールは笛の音で、吸血鬼を安らかに殺せる。私を救って。あのとき、四つ葉のクローバーに誓ったように……」

死んだダンピールは、吸血鬼になる。マリカは確かに死にかけたけど、吸血鬼なんかになってはいなかった。ただ、くだらない思い込みで、ゆっくりと心が殺されていった。

心だけが、先に死ぬこともある。

ごめんよ。マリカ。僕を含めた君のまわりが、君を吸血鬼にしました。

夕まぐれの中、笛の音が響く。
しめやかなレクイエムの調べが響く。

「大好きよ。イリヤ……」

砂が風に散るように、マリカは消えていった。
僕はレクイエムを吹き続けた。吸血鬼の魂ではなく、大好きだったマリカの魂のために、いつまでも吹き続けた。

「マリカ。あのブレスレットの意味は、本当は違うんだろう？」

いつか、マリカがくれたクローバーを見つめてひとりごちる。

もうひとつの、クローバーの花言葉は『私のものになって』。僕

は思う。マリカは知っていたんじゃないだろうか。この、悲しい花言葉を。

今となつては、確かめる術も無いけれど、『ずっと、家族がほしかった』というマリカの言葉が心にまといつき、いつまでも離れない。

多分、これからも忘れられないだろう。

風に、クローバーの葉が揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2117t/>

クローバーに誓って

2011年10月8日19時51分発行